Pinkerbell&TEAM145

CENTER BOYS

センターボーイズ

盛留真悟

ALGI Products

目次

本編脚本
1 2
2 5
3 12
4 19
5 24
6 28
7 32
8 38
9（大道具バージョン）. 44
9（小道具バージョン）. 47
10 52
11 65

設定
キャスト表　告知用 70
学内の概況 71
かず 73
タイガー 74
ロブ 75
ゆき 77
みよ 78
桃太郎 79
ロブの裏設定から読む **CENTERBOYS** 81

追加素材
劇中劇「赤頭巾さん」. 86

奥付
あとがき「理想の先輩」. 96
奥付 98

本編脚本

1

部室。

タイガー「コツっていうか、あっち側が結構長い脚本で、こっちらへんが短い感じ」

かず「せっかくだから、何分て書いちゃえば」

タイガー「演出によって長さは変わるからな」

かず「文字数とかになるのか？」

タイガー「だったら検討くらいならつく」

かず「じゃあ、これは？」

タイガー「短い」

かず「やるとどんくらいの時間なの？」

タイガー「数分！」

かず「ハードルとしては悪くない！」

ロブ「数分かあ。一日あれば練習できそうだ」

かず「本番の予定もないのに練習の話かよ！」

タイガー「練習やってない本番なんてやる意味あんのかよ」

かず「本番は本番だよ」

ロブ「そうだなあ、本番うったことないもんな」

タイガー「やるならちゃんと準備してやりたいだろ」

かず「だったらまずは場所を決めよう」

タイガー「いいや、やるべき内容が先だ。」

ロブ「かずとタイガーはいつもその平行線だな」

かず「だってさ、もうすぐ学園祭だよ。日程自体は決まってるじゃん」

タイガー「演目も決まってないのに会場申請出せるか」

かず「第一、サークル長どこ行ったんだよ。申請出す人いないし」

タイガー「あいつはミュージカル連合加盟のサークルと掛け持ちだ」

かず「えええええっ」

タイガー「今あっち忙しいんだよ」

かず「つうか俺、会った事ないんだけど」

タイガー「前サークル長の俺で我慢してくれ」

かず「我慢とかいう話？」

ロブ「忙しくないのは俺らくらいだろ。どうする？ 展示でもする？」

かず「小劇場研究会が展示って」

タイガー「いいじゃないか、展示」

ロブ「研究会だしな」

かず「そうだけどさ」

タイガー「かず。お前も掛け持ちしろよ。本番打てるところにさ」

かず「俺はこのメンバーと打ちたいんだよ」

タイガー「うちの大学に演劇っぽいサークルいくつあると思ってんだ」

かず「３つくらい？」

タイガー「たしかに演劇系サークル連合は３つある」

かず「ミュージカル連合と劇連と・・・」

ロブ「舞台芸術連合」

かず「え、あれってサークルじゃないの？」

タイガー「それぞれにいっぱいサークルが加盟してるんだよ」

かず「普通は体育会系か文化系かでしょ」

タイガー「演劇系はどっちでもあるから独自のあつまりなんだよ」

かず「そうか」

タイガー「ゆえに体育会寄りもあれば文化寄りもある」

かず「うちは？」

タイガー「文化寄りだ」

かず「・・・だよな」

ロブ「うちってもともとはさ、劇連がまだ演劇部だった頃の脚本チームだったんだって」

タイガー「なにその話？」

ロブ「かずは知ってるよな」

かず「え？」

ロブ「ここにやたら脚本が多いのは資料室だったからなんだ」

かず「そういうことか。」

タイガー「展示ならラクだぞ。放置して他のとこ見にいけるし」

かず「それはそれでやるけども！ なんか落ち着かないんだ」

ロブ「思春期か少年」

かず「もう済んだよ！」

ロブ「若い若い！」

かず「ここは小劇場研究会。大きな大学の、いっぱいある演劇サークルのひとつ。部員は少ない。部室には脚本がいっぱい並んでいる。タイガーはこれをすべて読んだらしい。ロブは７割程度。俺は最近、ただ読むのではなく、舞台に立ってみたいと思うようになっていた。だが、このサークルは本番を打たないらしい。」

タイガー「飯喰いにいこうぜ！ ・・・あれ？」

2

飛び込んでくる人がいる。

みよ「女子部員！ 参上！」

二人「きゅんきゅん」

二人の女子が素早く動く

かず「ちょっと待て。つっこみたいことがいくつかある」

みよ「いいよー」

かず「うちに女子部員なんていたっけ？」

みよ「なにいってんの」

ゆき「そうだそうだ」

かず「みよはギリギリわかる！ たまにいるからな。部員かどうかは知らないが」

タイガー「なんかイライラしてるのか？」

かず「一つ！ みよは部員なのか！」

みよ「部員です☆」

かず「本当に？」

みよ「たぶん」

ゆき「もうひとつは？」

かず「二つ！ あんた誰だ！」

ゆき「ひどーい。かず君ひどーい」

みよ「ねー」

かず「え、俺？」

タイガー「会ったことあるだろう？」

かず「誰だよ・・・あ？ あ？ あああああああ」

みよ「大事なこと忘れてるんだね」

ロブ「ゆきさんだよ？ 覚えてないの？」

かず「知らん！」

ゆき「もう、あんなになついてたのに？」

かず「なついてたってなんの話？」

ロブ「あの日のかずは記憶がなくなっていてもしょうがない」

ゆき「酔っ払ってたのか。しょうがねーなー」

かず「馴れ馴れしい！」

タイガー「幼馴染設定とか入れる？」

かず「これ以上混乱させるな！」

みよ「ひかえおろう！」

ロブ「ひかえいひかえい」

タイガー「このお方をどなたと心得る！」

かず「知るか！」

みよ「このお方こそミュージカル連合・総合基礎トレ隊長にして」

かず「総合基礎トレ隊長ってなに？」

タイガー「我が小劇場研究会サークル長」

かず「ちょ。」

みよ「ゆきさんだあああ」

かず「この人がサークル長？」

ゆき「かず君ひどい。かず君が私の為に脚本選んでくれるっていうからここに入れたのに」

かず「なんのこっちゃ」

タイガー「これまでの違和感が今初めてわかった気がする」

ロブ「俺も今わかった気がする」

みよ「あれでしょ。新歓で酔っ払ってゆきさんにここに放り込まれたんでしょ」

ロブ「その説明雑だな。芝居やろうと思ってミュージカル連合の新歓来たらゆきさんに騙されたってことだろ」

かず「あれ？」

ゆき「出たかったのか。やっぱり出たかったのか」

かず「なんだ！ あんたのせいか！ 本番打たないサークルに入ったのは」

ゆき「あっはー！」

かず「やっつけたい！ すごくやっつけたい！」

ゆき「助けて！ あなたしか頼れないの！」

全員「え？」

ゆき「もしものためにとこのサークルを保険にしておいて良かった」

みよ「保険？」

ゆき「大手演劇系サークル連合は学園祭で本番が打てない見込みとなった！」

全員「え？」

ゆき「企業から誘致したタレント教授が揃って大きな会場を横取りしてしまった。年に一度の大イベントに大きすぎる公演を用意していた私達は、場所を探したり、演目を変えたりがもはや間に合わない状況」

ロブ「ひどい」

ゆき「そう、ひどいの。さすがに３時間もののミュージカルが打てる場所もすぐに見つからないし、舞台芸術連合も半年かけて大道具作ったりでやる気なくしてるし、劇連ももはや学内を飛び出そうという過激派まで現れ、こんなに演劇系サークルがいっぱいあるのに、一つも打てる団体がないの！」

タイガー「んなばかな？」

ゆき「聞きなさいタイガー。政治力の全てを駆使してやっと手に入れた場所は食堂脇にある喫茶コーナー。しかも、仕込から撤収まで二十分！」

かず「バンドか！」

ゆき「正解！」

タイガー「えええええ？」

ゆき「アコースティック楽器連盟の対バンで１枠ゲット。」

ロブ「楽器片付けて、芝居やって、現状復帰して。実質十分ないかもな」

タイガー「やりたくねー」

ゆき「そう思うでしょ。普通そう思うでしょ。でもさチャンスじゃない？ 私達が呼んじゃったお客さんの行き場もないし」

みよ「チャンス、ですか？」

タイガー「断る！」

ゆき「ぐは！」

タイガー「やりたいものもないのに打つ芝居なんかクソだ」

かず「場所はある・・・お客さんはいる・・・脚本はきっとある」

タイガー「どうした？」

かず「誰だかよくわからないゆきさん」

みよ「なんて難しい日本語」

ゆき「なあに」

かず「くだらなくていいんですか？」

ゆき「くだらなくていい」

かず「練習とかしたことないですよ」

ゆき「私が教える」

かず「狭いんですよね」

ゆき「うんと狭い」

かず「それと・・・」

ゆき「ごめん。彼氏いる」

タイガー「俺だ」

かず「なんの話だ！　・・・いいでしょう。やりましょう」

ゆき「まじで？」

タイガー「台本は？」

ロブ「これだろ？ お前が最近ずっと読んでたやつ」（出す）

かず「ミッドスカイが上演した『赤頭巾さん』」

ロブ「甘いな。これは別の作品の中に出てくる劇中の劇団ミッドスカイが上演した劇中劇の『赤頭巾さん』だ」

タイガー「これか・・・俺その劇見たことある。あれ見てから、芝居に真面目になったんだよ」

かず「真面目？」

タイガー「やりたいんだな」

かず「うん」

タイガー「やりたいんだろ。やりたいならやったほうがいい。それが芸術だ」

ロブ「急に話が噛みあったな」

タイガー「やろう！」

かず「おう」

タイガー「ゆき。これでやる。手続きよろしく」

ゆき「わかった」

タイガー「舞台に立とう！」

ゆき「よーし！ 鍛えるぞぉぉ！」

全員「はい！」

ゆき「みよー！」

みよ「はい！」

タイガー「これ」

ゆき「脚本刷ってきて！」

みよ「はーい」

ゆき「作品は短い！ 脚本を渡されたら８時間で覚えろ！ わかったか！」

全員「はい！」

ゆき「基礎から演出まで全部面倒見る！」

全員「はい！」

かず「そして、俺達は練習を始めた！」

３

部員みんな並んでいる。

ゆき「お前らはクズだ！ カスだ！ 半人前だ！ 今からお前らを一人前の役者にしてやる！ 返事はハイだ！」

全員「はい！」

ゆき「まずは大きく息を吐いて！」

全員「すぅぅぅぅぅ」

ゆき「大きく吸って！」

全員「んんんん」

ゆき「止めて止めて止めて」

全員「・・・」

ゆき「吐いてー！ 吐き切ってー」

全員「ふぅぅぅぅぅ」

ゆき「息吸って！ 吸いきって！ 止めてー！」

全員「んぐぅ」

ゆき「お前らの貯まった息を全部吐け！ １．２．３！」

全員「ぶふぅぅぅううぅぅ」

ゆき「しっかりやれえええ」

かず「ぶほおおお」

ゆき「息漏れてる！」

かず「すみません！」

ゆき「返事はハイだ！」

かず「はいぃぃぃぃ！」

ゆき「みよ！」

みよ「ハイ！」

ゆき「口をちゃんと空けろ！」

みよ「ハイ！」

日が暮れてゆく。

ゆき「魂を燃やせ！ 役を掴め！ お客さんに飛ばせ！ そして会話をしろ！」

全員「はいぃぃぃぃぃ！」

ゆき「ちょっと休憩！」

暗めになる。みんなぐだーっと、なってる。

タイガーだけはなんとなく台本をめくっている。

かず「す、すげえな」

タイガー「あ？」

みよ「ゆきさんコワイ」

タイガー「まだまだ序の口だぞ。」

かず「えええええっ」

タイガー「ミュージカル連合の朝練とかこんなもんじゃないし」

みよ「コワイ！ 死にたい」

タイガー「死んだりなんかしたら殺されるぞ」

みよ「ぅあああああ」

かず「どんだけ体育会系なんだよ」

ロブ「ゆきさんは二年連続で姫川亜弓賞獲ってるしな。」

かず「すごいのか、その賞」

タイガー「おいおい！ 北島賞と姫川賞は倍率数千倍だぞ」

かず「その話深く聞いていいのか迷うな」

ロブ「とりあえず学内で 10 位以内には入るな」

かず「あれより凄いのがまだいるのか？」

タイガー「上には上がいる。それがこの世界だ」

みよ「私達はその最下層にいるんだよ」

タイガー「みよはその下っぱ根性直せよ」

みよ「私はみんなに寄生して生きていきたいんだー」

タイガー「声を大にして言うことじゃない」

みよ「発声練習したばっかりに、魂の叫びがぁぁぁぁ」

タイガー「魂を燃やせ。役を掴め。お客さんに飛ばせ。そして会話をしろ。」

みよ「ぁぁぁぁぁ」

かず「みよって結構、目立つのな」

みよ「なにがぁ」

かず「なにがってわけじゃないけど、いちいち目立つ」

みよ「練習で目立ちたくないよぉ」

かず「普段来ないけど、何してるの？」

みよ「続きはウェブで。」

かず「は？」

ロブ「話すと長いから、こんどブログ読んであげて」

かず「えええええ、目の前にいるんだから会話しようよ」

ロブ「それもそうだな」

みよ「まあ、そういうわけで・・・」

みよ。なんだか身支度。

ゆき「あら、みよちゃん。お帰りかしら」

みよ「ひぃぃぃぃ」

ゆき「私をさらっておいて、あんたが逃げるなんて有り得ないからね」

みよ「ライブが！ ライブがあるんですよ！」

ゆき「キャンセルしといたよ・・・自由が丘ぴこちゃん」

みよ「ひぃぃぃぃ」

ゆき「私の政治力を舐めないでね。そっちの代わりはいくらでもいるの」

みよ「今日は私のファンの人が・・・」

ゆき「逃げたら、悪い噂流すからね」

みよ「え！」

ゆき「稽古風景もね、撮り方によってはいろいろ使えるの」

みよ「ぁー！　ぅぅぅぅっぅぅ」

ゆき「バイト先にもキャラかぶりいっぱい送ってやるよ」

みよ「なにそれこわい」

ゆき「そろそろ台詞覚えた？」

かず「今基礎トレだったじゃないですか？」

ゆき「お前はあほか！」

かず「げ」

ゆき「基礎トレ中も休憩中も台詞を覚えろ！」

かず「できないでしょ」

ゆき「できるとか・・・できないとか」

タイガー「できるできるー」

かず「できないって」

ゆき「できるできないじゃないやるんだー！！！」

全員「ハイ！」

ゆき「時間がない分は戦略と勢いだ！」

全員「ハイ！」

ゆき「ジャンピング発声用意！」

かず「ハイ！　いやであります！」

ゆき「貴様！　どこの所属だ！」

かず「シングルキャストであります！」

ゆき「甘えるなー！」

かず「ハイ！」

ゆき「二倍出る奴は四倍努力しろ！ 疲れを見せるな！」

かず「ハイ！」

ゆき「ジャンピング発声用意！」

全員「ハイ！」

ゆき「せーの！」

台本持ってジャンピング発声！

滞空時間を利用してさらにいろいろ追加して良い。

途中から無音声になる。

かず「できるできないじゃない。やるんだ」

発声の音量がまた上がっていき、散っていく。

４

男子達がいる。みんな自然に台本持ってる。

かず「みよのやつ、結局、逃げたな」

タイガー「追っ手がかかってる。すぐ戻ってくるよ」

ロブ「無駄な時間稼ぎだなあ」

かず「あああ。なんか芝居してるってかんじだな」

タイガー「まあな」

かず「タイガーはなんで芝居始めたの？」

タイガー「いや、別にいつ始めたかは定かではない」

かず「自分のことでしょ」

タイガー「かずは部活とかやってなかったのか？」

かず「まあ、いろいろ」

タイガー「いい喩えがないなあ」

ロブ「タイガーは始めたのが早かったから、いつからやってるとかじゃないんだよ」

タイガー「まあ、そんなとこだ」

かず「そんなことあんの？」

タイガー「はじまりがないからおわりもない。だから俺、役者辞めますとかいってるやつらよくわかんないんだよな」

かず「微妙にわかんねー。それに練習してるの初めて見た」

タイガー「朝練は参加してる」

かず「誘われたことねー」

タイガー「一応、ここ優先にしながらよそと掛け持ちしてるんだよ」

かず「意外と俺、何にも知らないんだな」

タイガー「話には出していても、拾えてない情報はあるもんだ」

かず「だよなー」

タイガー「脚本の読み方と一緒だな」

かず「そうなの？」

タイガー「書いてあることに感情込めればいいってわけじゃない。感情や思考のやりとりの、たまたま表に出てるものが台詞やしぐさなんだ」

かず「でも、タイガーの役ってヒントなくね？」

タイガー「やり甲斐あるよ。自分の出番以外も読まないとどういう裏があるのかも分からないし、読むほどいろんな仮説もできる」

かず「俺ももっと読もう。俺のはまんまだからなあ」

タイガー「今のままでもやり過ごせるとは思うけど、いっぱい読んでその奥を知れば絶対に面白くなる」

ロブ「掛け合いでもしようかと思ったら、あんまし一緒の出番ないのな」

かず「俺は両方と少し絡むぞ。あれ？ あのさ、みよが帰ってきても少し足りなくね？」

タイガー「お前は気にしなくていい。ゆきがなんとかする」

かず「でも・・・でももだってもねえか。何にもわかんないから練習するしかねえし。」

タイガー「とりあえずそれぞれの課題だよな。」

ロブ「俺は台詞は入ってるから役作りだけなんだけど、実はつかめてない」

かず「早っ」

ロブ「台詞入れに時間かけるほどの役じゃないんだよ」

タイガー「俺は役作りはもう見えてるんだけど、それに適った表現が見つからない」

かず「それも早い！」

タイガー「重要なのは存在感と存在意義だ。もっと深めないと」

ロブ「タイガーでコケたらどうもなんないからな」

かず「あああ、表現はおろか役作りもままならない」

タイガー「お前はまず台詞入れろ。百回読めば意味から理解できる」

読む。

かず「なあ」

タイガー「なんだよ」

かず「俺の役作り合ってるのかなあ」

タイガー「ゆきに聞け」

かず「聞く前にすでに怒られるイメージしかない」

タイガー「そうか？ パキパキしてるのは忙しい時だけだ」

ロブ「時間あるときは優しいよね」

かず「いいなあ。優しい方がいいなあ」

タイガー「飯とか超うまいぞ」

かず「教えるのうまいわ、ご飯はおいしいわ・・・それってお母さんじゃん」

タイガー「母性は認めよう。あいつはいい女だ」

ロブ「なんて堂々としたノロケ話なんだろう」

かず「付き合ってることすらちょっと前まで知らなかったのに」

タイガー「今、ゆきが話題に出てるから話してるだけで、普段から話したいわけじゃないぞ」

かず「普通、彼女の話って自慢したいもんなんじゃないの？」

タイガー「人によるだろ。しかも今一緒の稽古場にいるんだ。恥ずかしい！」

かず「意外な一面を見ている気がする」

タイガー「大事だぞ。意外な一面。短い出番にだって第二印象はあるんだぞ」

かず「本当に演劇好きなんだね」

タイガー「芝居も好きだがゆきも好きだ」

かず「なんなんだ。タイガー」

タイガー「ぁぁぁ、もう」

ロブ「いろいろごっちゃにできない人なんだよ」

タイガー「俺はロブほど器用にはなれないー！」

ロブ「誰も器用になれなんて話してないよ」

かず「急に面倒くさい人になったな」

ロブ「感情だだ漏れだ」

タイガー「役作り進んでくるとさ、役保つのに意識集中するから、普段見えてるものが見えなくなるんだよね」

かず「つまり、俺がいつもどおりということはまだ役が入ってない？」

タイガー「そうとは限らないけど、見えてないならまだだろう」

ロブ「掴む瞬間が来るんだよ」

かず「掴む瞬間かあ」

タイガー「恋にもあるぞ。掴む瞬間」

かず「えええええ。恋バナ」

ロブ「まあ、かずはみよに狙われてるからな」

かず「どういうこっちゃ。たまにしか見ないし」

ロブ「学園祭はこういうのがねえ、むふぅ」

かず「え、そんなキャラだったっけ」

タイガー「あ、そろそろ集合だ」

かず「よいしょ」

ゆき「そろそろ始めるよー」

ロブ「呼吸合ってるぅ」

ゆき「お、からかう気か、このやろー」

ロブ「ひゅー」

ゆき「せっかくだ。タイガーと話すから二人は部室行ってて！」

ロブ「はーい。お二人仲良く」

ゆき「言われなくても仲良しだ」

かず「じゃあ、先行ってますね」

ゆき「おう、少しあっためとけー」

二人「はーい」

かずとロブ、掃ける。

5

5

タイガー「ゆき・・・」

ゆき、よろめく。タイガーが座らせる。

タイガー「大丈夫か」

ゆき「あ、うん。さすがにしんどい」

タイガー「こないだも倒れてたじゃないか。無理すんなよ」

ゆき「ごめん。でも、今は踏ん張りどころだから」

タイガー「もう限界超えてるんだって。退きどころを心得ろよ」

ゆき「ありがとう。」

タイガー「心配事でもあるんだろ。話してみろよ」

ゆき「・・・」

タイガー「女性キャスト、見つかってないんだな」

ゆき「・・・申し訳ない」

タイガー「俺も、探すよ」

ゆき「タイガーは練習して。これは私の役割なんだから」

タイガー「今日中に見つからなかったら、どうにもならないだろ」

ゆき「女性の役は三人、私が二役やればなんとかなるから、私以外にもう一人いればなんとかなる。そういう計算でみよを確保したんだけど・・・」

タイガー「仕方ないよ。急にあんなに練習したら普通折れる」

ゆき「こんなの初めてだよ。キャストなんてすぐに見つかると思ってた」

タイガー「お前、結構慕われていると思ってたんだけどな」

ゆき「男性は結構仲良くしてくれてるけど、女子は敵味方どっちも多い」

タイガー「味方はどこ行ったんだよ」

ゆき「私とつるむような女子はみんなプライドが高い」

タイガー「普段が恵まれ過ぎなんだよ。豊富なキャストの中から選ばれたものが舞台に立つ世界にいる。お前は勝ち残ってきた。役者は腐るほどいると錯覚してる」

ゆき「いつもは役が欲しいって言ってる人が、こんなときは見向きもしないんだよ。出れば絶対に勝てるような舞台にしか立ちたくないんだよ。私の現場はこんなにも必要としているのに」

タイガー「不思議なもんだな。普段舞台に出たがっているやつらが戦わないようなこの現場に、俺ら小劇場研究会がいる」

ゆき「どうしたらいいかな」

タイガー「え？」

ゆき「なに、えって？」

タイガー「お前が相談なんて珍しいなって」

ゆき「かわいくないなー、私」

タイガー「お前はいい女だ。そしていい演出だ」

ゆき「かわいくないよ。プライドでただ立ち尽くしてるだけ」

タイガー「倒れてるけどな」

ゆき「ぐは」

タイガー「第一線のお前が俺達に声をかけてくれた。それで充分だ。」

ゆき「ねえ」

タイガー「ん？」

ゆき「今までいまいち聞きにくかったんだけど聞いていい？」

タイガー「いいけど」

ゆき「朝連も出ていて、他のサークルも手伝っていて、実力もあるのに、なんで長いこと舞台に立ってないの？」

タイガー「簡単にはいいにくいな。ってゆうか、急に言われてもな・・・強いて言えば・・・『立つ理由』がなかった。それだけだ」

ゆき「わからんでもないけど、わからない」

タイガー「お前は修行したいんだからどんどん出ればいい。俺には理由が必要なんだ」

ゆき「じゃあ、なんで今回は立つ気になったの？」

タイガー「本だよ」

ゆき「本？ あれになんの意味が？」

タイガー「あー、もう、うるさいな」

なでるなどする。

ゆき「ありがとう」

タイガー「言えるようになったら言う。自分の感情で満たされるのが、なんか勿体無い。今は役に魂入れたい」

ゆき「役者、面倒くさいね」

タイガー「だな」

ゆき「そろそろ、行く？」

タイガー「ぼちぼち・・・な」

ゆき「うん」

タイガー「ああ、そうだ。相談て言ってたな」

ゆき「忘れてた」

タイガー「Ｂ型」

ゆき「てへ」

タイガー「一つ、ヒントをやろう」

ゆき「うん」

タイガー「熱い稽古場には人が集まる」

ゆき「へへ」

タイガー「まあ、一人失踪したがな」

ゆき「超笑えない」

タイガー「行こう、演出」

ゆき「・・・はい」

タイガー掃ける、続いてゆき掃ける。

6

6

かず、ロブ、入ってくる。

かず「部室ってこんな感じだったっけ？」

ロブ「すごい。食堂と同じセッティングだ」

かず「誰がやったの？」

ロブ「ゆきさんでしょ。丁寧だなー」

かず「さっきのとこ、普段は人が居て、居づらいんだよな。今日はいないのかな」

ロブ「溜まっている連中偏っているから、ほとんど縄張りだよな。確かにあそこに人がいないのは違和感ある。学園祭の準備もあるし、それぞれの現場にいるんだろう」

かず「たまに思うんだけど、ロブってなんでも観察してるのな」

ロブ「まあ、読むのが役割なんだ。本とか空気とか未来とか」

かず「意味わかんねー」

ロブ「こっちは観察する側なんだから、観察される側のかずが口を挟むな」

かず「自由研究か！」

ロブ「・・・近いんだけどなんか微妙だなー」

かず「申し訳ない」

ロブ「とりあえず、あっためとけってどんくらいなんだろう。ジャンピング滑舌しとく」

かず「・・・あっためすぎじゃね？」

ロブ「・・・だよな。俺、ちょっと麻痺してきてて危険な発言をしそうになっていた」

かず「微妙に筋肉痛が気持ちいいんだけどね」

ロブ「まじか。ちっきしょう、若いなあ」

かず「やる？」

ロブ「しょうがねえなあ・・・ジャンピング滑舌、用意」

ジャンピング用意

ロブ「待て！」

かず「なに？」

ロブ「今の段階で各自があったまってどうする」

かず「どうするの？」

ロブ「よし。会話をしよう。今の俺達に必要なのはコミュニケーションだ」

かず「そういうあったまる、か」

ロブ「かずのそういう感覚、いいよ。凄くいいよ」

かず「エロカメラマンか」

ロブ「いいよー。いいよー」

かず「中身ある話した方がいいよね」

ロブ「いいよー。いいよー」

かず「話題か？ いつも質問責めにしてるからかいざ話題となると」

ロブ「じゃあ、俺から質問。なんで演劇したくなった？」

かず「わりとがっつりなテーマ」

ロブ「状況を考えろ。演劇サークル全部ピンチ！ 小劇場研究会参上！ 小劇場研究会ピンチ！ さてここで問題だ。人が居ないだの、時間がないだの、ごちゃごちゃ考えるタイミングが高い確率でやってくる！ そこで大事になるのはなんだ」

かず「やる気！」

ロブ「正解！ しかし、途中式を間違うなよ。たぶんこのあと、

タイガーとゆきさんがやってきて何食わぬ顔で『よーし、練習だー』『魂を燃やせー』となる。まあしかし練習しているうちに誰かが違和感に気づく。人手不足の件、いつ片付くのかなーって。で、緊急会議だ。話は行ったり来たりして、結局、何故舞台に立つのかという問いが起きる。それを確認したらやる気を出してまた動き出す」

かず「読みすぎだろ」

ロブ「これが俺の青春だ」

かず「わからない」

ロブ「今日に限ってはその行ったり来たりの話し合いが長引くのが御免だ。」

かず「今日に限って？」

ロブ「そうだ。毎日毎日、場所が先だ本が先だと言って平行線を辿り、

偶然昨日、こういうことになった。まさにかくかくしかじかだ」

かず「わりと略してねえ」

ロブ「別に普段は本番前でもないから、その平行線は交わる必要はない。だが、本番まで二十四時間をきろうとしている今、俺は役の入り損だけはごめんだ。はいりぞんてのはあれだぞ、役が入ったのに本番がないという悲劇だ。今まさに学内にはびこっている危険な病だ。だから、問う。かずはなぜ舞台に立ちたい、いや、最初の問いは『なんで演劇したくなった？』」

かず「そんなに大事な話題か？」

ロブ「一年の大半を演劇で過ごしている奴らの穴をなぜか、本番を打たないサークルが埋める。そこに動機はあるはずだ。公演を打つ意味だな」

かず「なんでだったかな？ ロブは？」

ロブ「くっ。全力で返ってきた。これが若さか」

かず「一個しか違わねえーし」

ロブ「俺かあ、かずがもやもやしている間に考えようと思ってたのにな。あれだ、その・・・」

タイガー「よーし練習だー！」

ゆき「魂を燃やせー！」

かず「おー・・・おおおう」

ロブ「くそう・・・これが俺の青春だ」

かず「面白いなロブの世界」

7

7

タイガーとゆきが入ってくる。

ゆき「よし、今から約二十四時間後、本番を迎える。その前に確認したいことがある」

タイガー「唐突だ」

ロブ「唐突だ」

かず「Ｂ型か」

ゆき「かくかくしかじかで、人がいないのよ！」

かず「そこを略すんだ」

ロブ「『のよ』と『だわ』はどこから来た言葉なんだろう？」

ゆき「そっち？」

タイガー「とにかく稽古だ。できるとかできないとか今はいい」

ゆき「人がいないと練習できないじゃない」

タイガー「それはなんとかなるって言ってるじゃないか」

ゆき「うふ」

タイガー「うふじゃねえ。唐突に爆弾落とすな」

ロブ「打診はしているんだし、待とうよ」

ゆき「時間がない」

タイガー「それを今ここで話してなにが進展するんだ」

ゆき「そーこーで！」

みんな「・・・」

ゆき「団結を確認するため各自の戦う理由を聞こうかと」

かず「そこに本番があるからだ！」

ロブ「展開早い」

かず「試合があるから出る。本番があるから出る」

ゆき「用意していたかのような即答」

タイガー「この本なら出てみたい」

ゆき「そういやそうだね」

ロブ「俺は・・・この本番がヒントになればいいと思ってる」

みんな「なんの？」

ロブ「いつもは全部流してるくせに、こういうとこは食いつく」

かず「なんのヒント？」

ロブ「俺はこの本の作家のこと研究してんだよ。この本の俺らがやるところにきっとヒントがある。学術的興味だ。以上」

ゆき「頭いいやつの言葉ってたまにむかつく」

ロブ「ゆきさーん」

タイガー「気づかなかった。同じ本に興味があったなんて」

ロブ「すかさず出した時点で縁はある」

かず「なんで今まで言わなかったの？」

ロブ「基本は読むだけでいいんだよ。演じたらもっと分かると思ったんだよ」

ゆき「本番があるから」

かず「はい」

ゆき「学術的キョーミ」

ロブ「はい」

ゆき「私は・・・プライド。半年前から、この日に舞台に立つと決めていた。これはもはや信念と言える。この身が滅びても、立っていたい。キャストの件は反省している。他の人にまで、自分のプライドは押し付けられない」

タイガー「喩えでいうのはいいけど、まじで倒れるとかやめろよ」

ゆき「倒れません」

タイガー「お前が倒れるくらいなら、延期してもいい」

ゆき「この本好きだから、打つんじゃないの？」

タイガー「芝居も好きだがゆきも好きだ！ ・・・あれ？」

ゆき「嬉しいんだけど、殺したい」

タイガー「殺せ。俺を殺せ」

かず「いいから。そういうのいいから」

ゆき「この本がいいって言うから、明日打つために死ぬ思いして人集めてるんだよ！ あなたがやりたいっていうから！ 私いつも彼女らしいことしてないから！

全力なんだよ！ 延期とか言ってんじゃねえよ！」

タイガー「芸術をなめるな！ やる気も健康もあって、やっとスタートラインに立てるんだよ！ 環境なんてどうにでもなる！ 体壊してもいい芸術なんていらねえよ！」

ゆき「なにそれ私の愛がいらないっていう意味？」

タイガー「誰もそんなこと言っていない。できないことまでするなって言ってるんだ！」

ゆき「それで演目変えて、あなたが出てくれるの？ そしたら私なんなの？」

タイガー「無理をするなって話してんだ」

かず「できるとかできないとか」

ゆき「できないよ！ タイガーがいなきゃ私なにもできないよ」

かず「できるとかできないとかいってんじゃねえよ！」

タイガー「落ち着け」

かず「やるって決めたんだろ。立ち止まってんじゃネエよ！」

タイガー「ぶほ」

かず「やってられっかよ！」

かず、掃ける。タイガー、腹に九ポイントのダメージ。

ゆき「タイガーぁぁぁぁ」

ロブ「うわぁ」

ゆき「かず！ ちょっと！」

ロブ「キレどころがわからん。・・・・なんなんだこれ（※）」

※うずくまるタイガー、寄り添うゆき、どっかいったかず

ロブ「タイガー大丈夫か？」

タイガー「かずが心配だ」

ロブ「ゆとり世代のくせに、暑苦しいなあ」

ゆき「あれ？ 追いかけないの？」

ロブ「俺か？ ここはリーダーの出番なんだよ！」

ゆき「そっか・・・」

タイガー「無理すんなって」

ゆき「高城有貴、行きます！」

ゆき、ダッシュ！

タイガー「みんな、落ち着けよ！」

ロブ「意外な共通点を見つけた。あいつら体育会系だ」

タイガー「だからなんなんだ」

ロブ「走れば解決」

タイガー「・・・あるある。いたたたた」

ロブ「人が殴られてるのはじめてみた」

タイガー「何、勉強してんだよ。痛いんだぞ」

ロブ「さて、サシになったし、聞いておこうか？ タイガーが舞台に立たなくなった理由」

タイガー「さっきも同じこと言われた気がするなぁ」

ロブ「知らなきゃなんねえんだよ。俺らの青春の意味を」

タイガー「そうだな・・・」

8

8

タイガー、独白シーン風味

タイガー「今からちょうど三年前だ。小学校・中学校・高校とずっと演劇部だった俺は、いつも文化祭やら大会やらで忙殺されていた。早く始めたやつの特権で、どこいってもそこそこできるやつ扱い。まさに調子に乗っていたが、疲れてもいた。この大学に来ることは決めていた。というかこの道以外の選択肢を用意してこなかった。俺はこの道を選んだわけじゃない。ただ別の道を知らなかった」

タイガー「来ると決めていた大学の学園祭を訪れた。

丁度、一年のルーキー達を中心に大きな公演をやっていた。当時俺は高校三年生。十代後半にもなれば一つの年の差なんて大したことない。だがだ。感動した・・・圧倒的な差を感じた。そこには熱意と練習量があった。芸術は衝動なんだと思った。日程をこなしているだけになっていた俺は、一からやり直したくなった。好きで好きでしょうがない舞台。そういうものをどうしてもやりたくなった。そのためにはたくさんの練習も必要だし、全てを懸けられる本が必要だ」

タイガー「入学するまでに、このサークルを突き止めて、最近ようやく全部読み終えた。どれが好きか決まる前に、この本の出番だ。不思議なんだけどさ、あの時観た芝居だったんだ」

タイガー「あらすじはこうだ」

ロブ「誰を主人公とするか定義は難しいが、タイトルにある名前の少年を主人公としよう。十四歳の演劇少年だ。もうひとり十四歳の少年が出てくるが、そっちは日常を送るためのもうひとつの人格。さて、少年は十代後半の女優と出会う。この若い女優が練習してたのが今回俺らもやる『赤頭巾さん』。少年は個人練習の相手をしていた。そして、二人はある意味で師弟となる。この作品には想像力を増幅させるというファンタジーな設定があって、このせいで事件に巻き込まれる。」

タイガー「未来とか？」

ロブ「その力が実用化されてしまった未来・・・なんというか演劇が魔法のようになった未来を止めるために、刺客が訪れる。そして死んだのは女優だ。少年は小さい体を活かし、女優の代役をかってでる。赤頭巾は少年が演じた。そして、女優の名を名乗った」

タイガー「熱いわりにＳＦなんだよな」

ロブ「力の起源はこの女優にあると思い込んでいたが、実は少年にその力があった。記録上、女優が舞台に立っていたため、未来のやつらは間違って刺客を送った」

タイガー「うん」

ロブ「観ていると感動するのに、あらすじにまとめるとおかしな点が多い。どうにも劇中劇の『赤頭巾さん』にヒントがあると思えてならない」

タイガー「あんな長い話、よくまとめられるな」

ロブ「ただの込み入った話でも、魂入っていれば感動する。にしてもだ。この作者、他の作品でも、少しずつヒント出してるんだよな」

タイガー「それが学術的興味か？」

ロブ「少年漫画とかだと主人公らしき人物の特殊能力って、普通、メインに持って来るんだよ。なんでちょいちょい触れるんだかわからん。しかも劇中劇の意味もナンセンスだ」

タイガー「そうか？ 体感すればわかるよ」

ロブ「えええええ？」

タイガー「熱が伝播するとき、芸術は生まれる。」

ロブ「シンプルだなー」

タイガー「アイデアプラス気合いイコール芸術だ」

ロブ「これはこれで正解のひとつとしておこう」

タイガー「俺が立つ意味は原点の確認だ。ロブが立つ理由は、体で感じること！」

ロブ「それでいっか」

タイガー「面白いこと教えようか。当時のルーキー達が今のそれぞれの連合の連合長なんだよ」

ロブ「昔話みたいに聞いてたけど、なにかがタイムリーだ」

タイガー「教えたついでに、質問なんだが、お前は何者なんだ」

ロブ「ストレートだなあ。・・・将来を考えるために大学にいる。ってゆうか部室にいる」

タイガー「含みのある答えだ。いつも遅くまで残って勉強してるのか？」

ロブ「俺は受験の真っ只中、いろいろあったから、ちょっと休んでるんだ。」

タイガー「読書で？」

ロブ「部室に居るの好きなんだ。ちょっと遅くまで残ってると本借りに来る人とかいるんだよ。少女にしか見えないお姉さんが、俺を図書館の人かなにかだと思っているのか、貸し出しカード書いて渡すんだ」

タイガー「微妙にホラーだ」

ロブ「よくみると貸し出しカードじゃないんだけどね」

タイガー「うちの部室たしかに図書館みたいだな」

ロブ「そういう出会いもあるんだよ」

かず「えええええ」

タイガー「えええええ。そっち？」

ロブ「進展はしてないって。ってゆうかかず？」

かず、入ってくる

かず「ごめん。タイガー」

タイガー「大丈夫だ」

ロブ「どこ行ってたんだ？」

そのへんを指差す

ロブ「えええええええ。」

かず「ずっと聞いてた」

タイガー「恥ずかしい。聞かれていたかと思うと、より恥ずかしい。滑稽だ」

ロブ「話す手間は省けたな」

かず「ごめん。途中でいっぱいいっぱいになっちゃって。」

タイガー「いいよ。いいもん持ってるな」（パンチの話）

かず「二人の話聞いちゃったから俺も話したくなってきた」

タイガー「いいぜ。聞いちゃうぜ。お前、なんで演劇始めた」

かず「なにから話そうかな」

ロブ「体育会系なんだよな」

かず「それだ・・・俺、結構スポーツ万能だったんだけど、故障しちゃって・・・いや、人並みの運動はできるんだけど、トップアスリートとしては無理っていうか、足の付け根とか膝とか全力は無理なんだ」

タイガー「ジャンピングしてたよな」

かず「あれくらいなら別に」

ロブ「あれが大丈夫ならだいたい大丈夫だろう」

かず「練習という感じならいいなんだけど、競技となると無理するからさ」

タイガー「それで」

かず「それで、体育会系文化サークルならいいんじゃないかって勧められて」

タイガー「ここにきたわけだ」

ロブ「元が体育会系ならゆきさんとも気が合うわな」

かず「そう？」

ロブ「どうみても姉弟だろう」

タイガー「わかるわかる。違う意味で仲良かったら泣く」

かず「そこは大丈夫だ。俺、恋愛してる場合じゃないから・・・てゆうかやばい感極まってきた。まだ地元いた頃、運動できなくなってちょっと荒れちゃってさ。姉ちゃんに随分当たっちゃったんだ。姉ちゃん『自分を乗り越えなさい』って。でも、俺喧嘩売ったままこっち来ちゃったんだ。だから芝居でたら、仲直りできるかなって。乗り越えたいんだよ。俺、ぎりぎりじゃないとがんばれないからさ。本番打ちたいんだよ！」

ロブ「凄くいい話なんだけど、かずは本当、途中式が抜けてるんだな」

ゆき「うわあああああ」

タイガー「ゆき！」

ロブ「あんたもそこに？ 家政婦か！」

ゆき「二人の話も聞いてたけど、かずの話が一番きたよぉぉぉぉ」

タイガー「くらべるなー」

かず「おねーちゃーん」

ゆき「かずぅぅぅぅぅ」

タイガー「姉がいる弟と、弟がいる姉か。話が早い！」

ゆき「みんなと舞台立ちたい！ 他に理由いらない！」

ロブ「いっか、それで。」

タイガー「立て、ゆき！」

ゆき「・・・はい」

タイガー「魂を燃やせ！」

かず「役を掴め！」

ロブ「お客さんに飛ばせ！」

ゆき「そして会話をしろ！ できるできないじゃない」

みんな「やるんだー！」

ゆき「仲間に魅力よ届け！」

みんな「おー！」

ゆき「タイガー！ 愛してる！」

みんな「おー！ おお？」

ゆき「みんな、大好きだー」

みんな「おー！」

タイガー「作戦はこうだ。しっかり練習する！ その熱で仲間を集める！」

みんな「おー！」

タイガー「ロブさ・・・あれ？ あれ？」

ロブ「何」

かず「何」

９（大道具バージョン）

タイガー「なんだ、このプレッシャーは！」

乾ゆうと歌いながら参上。なんと、みよを持って来る。

全員「えええええええ！」

ゆうと「ほうら、君の居場所はここだよぴこちゃん」

みよ「はい」

かず「え、おみよ」

ゆうと「稽古場ではいい子にするんだよ」

みよ「はい」

ゆうと「と、いうわけで、あとはまかせちゃっていいのかなゆっきー」

ゆき「あざーす！ ほら、みんなも！」

全員「あざーす」

ゆき「ちっげーよ！ アリガトウゴザイマスだろ！」

かず「理不尽」

ゆき「せーの」

全員「ありがとうございます」

ゆうと「なんのなんの。はっはー」

かず「てゆうか誰」

ゆうと「名乗るほどでもない。ゆっきーのファンだよ」

ロブ「ミュ連の連合長・乾ゆうとさんだよ」

タイガー「こんなに近くで見たの初めてだ。」

ゆうと「しょうがないなあ、劇団プラチナウィング代表、そしてミュージカル連合の連合長・乾ゆうとです。」（効果音）

ロブ「あ、やばい！ ・・・掴んだ☆私の役」

タイガー「・・・おそろしいこ」

ゆうと「はい。役を掴んだ子にプレゼント（なにか渡す）」

かず「てゆうか誰」

ゆうと「じゃ、僕はここまで。よく働く先輩を持って、君たちは幸せ者だね。ほうらぴこちゃんも」

みよ「はい」

ゆうと「お、君がちょうどよさそうだ。あとはまかせたよ」

かず「え？ 何を任されたの？」

みよ「恥ずかしながら、帰って参りました。皆様ご心配をおかけしました」

ゆうと「なにかこまったことがあったら、また呼んでね」

ゆき「ありがとうございます」

タイガー「あの」

ゆき「いいよ」

タイガー「いや、今言うしかない！」

ゆき「ちょっと」

タイガー「ゆきはプライドが高くて誰にもお願いしてないのですが、役者が一人足りません！」

ゆうと「男性？ 女性？」

タイガー「出来れば女性で」

ゆうと「君たちは運がいい・・・後ほど凄い人が来る。じゃ。」

乾ゆうと。告知をしながら掃ける。

ロブ「告知かよ。好き放題だな」

タイガー「よく帰ってきたな、みよ」

かず「てゆうか本当に追っ手がかかってたんだ」

タイガー「どうやって見つかったんだ」

みよ「バイト先も、おうちも危ない気がして準備中の執事喫茶に逃げ込んだら・・・なんかうまく丸め込まれて」

９（小道具バージョン）

タイガー「あれ？ 猫かなんか鳴いてないか？」

冬月勝。みよをひきずりながら登場。

みよ「やーだあああああ！ いかああああなああいいい」

冬月勝「ほら稽古場だ」

みよ「なんでみよが行きたくないって言ってるのに連れてくるの？」

冬月勝「稽古場から逃げちゃ駄目だって教えただろ」

みよ「そこをあえて逃げたんだよ！ みよは駄目な子なんだよ」

冬月勝「駄目な子でもいい。お兄ちゃんは練習するみよが好きだ」

みよ「やああっだあああああ」

タイガー「お兄ちゃん？」

ゆき「あの・・・冬月さん？」

冬月勝「ああ、ゆっきー。ごめんね。時間かかっちゃった」

ゆき「どうもありがたいことです」

冬月勝「みんなもごめんねみよがさあ」

みよ「やあああめええてええよおおお」

かず「お兄ちゃん？ え？ ファンの人」

冬月勝「よく間違われますが、ガチお兄ちゃんです」

みよ「言わないでえええええ」

ゆき「冬月勝さん。冬月冬月・・・あああ」

みよ「うわあああああ」

ゆき「本名冬月美夜だったな。」

みよ「ゆき先輩ぃぃぃぃ」

冬月勝「いいんだよこの現場の人には本名教えても」

みよ「本名教えちゃ駄目って教えたのおにいちゃんでしょ」

冬月勝「確かにお前を自由が丘ぴこにしたのはお兄ちゃんだ」

ロブ「あ、あのう」

冬月勝「おお、ロブ！」

ロブ「超・記憶力いい・・・えっとロボカンパニーの」

冬月勝「あああ、どうもどうもロボカンパニー主宰の冬月勝です。舞台芸術連合の連合長などもしております。ヲタ属性はボーカロイド。スタッフ畑ですが、舞台にも立ちます。ロブ君とはね照明オリエンテーションでお話した間柄でしてね」

みよ「もおおお。」

冬月勝「お前の妹性は俺一人では応えきれない。そこで、お兄ちゃんは全国に同志を募った。いいか、この大学にはお前を守る無数のお兄ちゃんがいるんだ」

みよ「気持ち悪い」

冬月勝「こっちの世界では褒め言葉ですよ」

みよ「むかつくぅ」

タイガー「兄妹喧嘩なのか？ これは？」

ゆき「冬月先輩、ありがとうございます」

冬月勝「いやあ、ゆっきーに感謝されるなんて嬉しいなあ。って彼氏君怒らないでね」

かず「みよ、おかえり」

冬月勝「さわやかだねえ。こういう人と恋愛するんだよ」

みよ「やめてよそういうの」

ロブ「つうかよく見つかりましたね」

冬月勝「みよの私服写真あげるって言ったらみんな情報いくらでもくれたよ」

みよ「なんでそういうことするのおおお」

冬月勝「いい加減にしなさい」（叱っといて、くすぐろうとする）

みよ「あはははあはは」（触れなくとも笑える）

冬月勝「お前はちゃんと練習すればちゃんと演劇ができる子なんだよ」

みよ「その過剰な期待が多くの美少女のプレッシャーになるんだよ！」

冬月勝「ならば病んでしまえ！ ヤンデレも大好物だ」

みよ「この世に正義はない！」

冬月勝「あ、ロブ！ これあげる」

ロブ「なんすか？」

冬月勝「こうやって、いろいろ使えるから」

ロブ「はい」

かず「あざーす」

タイガー「あのぅ」

冬月勝「ごめんねえゆっきーの彼氏君。気安く話しかけちゃって」

タイガー「舞台芸術連合の偉い人ですよね」

冬月勝「偉いかはわかんないけど大事な仕事はしてるね」

ゆき「やめなさいって」

タイガー「役者を紹介してくれませんか？」

冬月勝「いいよ」

ロブ「早っ」

冬月勝「ちょっと待っててね。えっと女優さんだよね」

ロブ「事情に詳しすぎるでしょ」

冬月勝「何言ってるんですか。この状況で舞台打つなんて面白そうな話、知らないわけないよ。うーん、ちょっとしたらくるから」

ロブ「あ、はあ」

タイガー「ありがとうございます！」

冬月勝「じゃあ、みよをよろしく」（エアくすぐり）

みよ「あはははははは」（くすぐったい）

全員「あざーす」

冬月勝、物販の告知をしながら掃ける。

ロブ「面倒くさい人だな」

タイガー「よく帰ってきたな、みよ」

かず「てゆうか本当に追っ手がかかってたんだ」

タイガー「どうやって見つかったんだ」

みよ「バイト先も、おうちも危ない気がして準備中の執事喫茶に逃げ込もうとしたら・・・お兄ちゃん達に見つかって」

10

タイガー「すごい組織力だ」

ゆき「今回はあえて叱らない」

みよ「え」

ゆき「叱ってあげない」

みよ「私を叱って下さい」

ゆき「叱らない」

みよ「ぶってください」

ゆき「叱らない」

みよ「私を好きにして下さい」

ゆき「このﾄﾞMがあああああ」

ロブ「結局キレるんだ」

かず「すっげえな」

ゆき「叱ってあげない」

かず「もう一回？」

ゆき「お前には叱る価値がない！」

みよ「申し訳ございませんでした。」

タイガー「そして俺達にはもう時間がない」

ゆき「タイガー」

タイガー「みよも戻ってきた。あと一息だがんばろう！」

かず「そうだな。よーし、やっちゃうぜ」

演技に入る。

かず「これならどうだ」

空を斬るパンチ。

桃太郎「当たらないよ」（変な位置から）

かず「？ ・・・どうかな」（振り向く）

桃太郎「うぐっ・・・なんだこれは」

かず「強くなっただろう？ あんたに勝ちたくて鍛えたんだよ」

桃太郎「お前はミスを二つ犯した」

かず「あん？」

桃太郎「一つは時間帯が悪い」

かず「あん？」

桃太郎「もう一つは私をやる気にさせたこと」

かず「話が早いな」桃太郎「ふんっ」

丁寧に組み手。

ゆき「ハイ」（もしくは手を叩く）

桃太郎「動きはまあまあだな」

みよ「桃太郎先輩」

桃太郎「自由が丘ぴこか。すぐ捕まったみたいだね」

みよ「桃太郎先輩のせいですよ！ なにかあったら執事喫茶に逃げろって」

桃太郎「めでたしめでたし」

みよ「うぼぁ」

桃太郎「よし、みんなにこれをあげよう」（みんなに何かを渡す）

全員「おおお・・・ん？」

かず「〇〇ライブ〇〇にて」（桃太郎役の手近な告知）

ロブ「って、また告知かよ！」

ゆき「告知？ ・・・あなたはもしや」

タイガー「偉い人が言っていた人では」

桃太郎「やっぱり来てたのか。あやつ、この辺にいると思って来たらそういうことか」

タイガー「役者やって下さい！」

かず「直球！」

ゆき「え、この人は」

桃太郎「よかろう」

タイガー「うぉぉぉおおおおしゃあああ！」

ロブ「展開が早い！」

タイガー「この人にやってもらおう！」

かず「え、うん。そうだけど」

タイガー「役はえっと。その前に本か」

桃太郎「本ならいい。知っている」

タイガー「知っている？」

桃太郎「その棚のそこらへんにあった脚本だろう赤なんとかだ。奥の本のらいなんとかにも劇中劇で入ってた。この部屋にある本はいつかやると思って百回は読んだ。」

ゆき「聞いていた以上のお人だ」

桃太郎「おお、ゆっきー」

ゆき「いやいやいや。恐れ多い」

桃太郎「なんだなんだ」

ゆき「なんだなんだじゃないです。はいみんな注目」

かず「はい」

桃太郎「桃太郎である」

ロブ「簡潔！」

ゆき「紹介します！ 我が校すべてのサークルに所属し、且つ、三つある演劇系連合の連合長を個人的に束ねる大御所中の大御所・桃太郎先輩です！」

桃太郎「よきにはからえ」（みんなに何かを渡す）

全員「おおお・・・ん？」

かず「（当日入っているチラシを参照する）」

ロブ「って、また告知かよ！」

みよ「桃太郎先輩はみんなのマスコットなの」

桃太郎「まあ、そんなことより演出は誰だ」

ゆき「私です」

桃太郎「私はどこまで口を出していいんだ」

ゆき「どんどん言って下さい・・・（ぶつかりあうみたいな説明を我慢して）すり合わせます」

桃太郎「そこの者」

かず「桃太郎先輩」

桃太郎「いかにも」

かず「なんでしょうか」

桃太郎「センターに立て」

かず「え？」

桃太郎「センターだ、センター。どセンターでいい」

タイガー「舞台の真ん中の真ん中」

かず「ここですか？」

桃太郎「そんなもんだ。意識しろ。そこは真ん中だ。」

かず「はい」

桃太郎「お前は自分の役をなんだと思っている」

かず「引き立てるっていうか」

桃太郎「それは真ん中か？」

かず「脇役っていうくらいだから、真ん中ではないですね」

桃太郎「お前は人生の真ん中か」

ロブ「深い」

かず「意味がわかんないです」

桃太郎「センターに立て。その意味だけ考えろ」

かず「センターに立て？」

桃太郎「動きなど諸々は大丈夫だ。あとはゆきにまかせた。」

ゆき「はい」

桃太郎「困っているサークルがまだあるのでちょっと見てくる」

桃太郎、掃ける。

みよが一緒に出て行こうとするが捕まる。

かず「センターに・・・立て？」

タイガー「よぉし、俺はいけるぞ。俺の表現をするぞ」

ロブ「俺も行ける。見えた！ 見えたぜ！」

みよ「みよ！ 行きます！」

かず「センターに・・・立て？」

タイガー「悩め！ 苦しめ！ でも負けるな！」

かず「あ・・・うん」

ゆき「仕切り直しだ！」

みんな「おー」

かず「おぅ」

ゆき「どうした」

かず「ちょ、あの」

ゆき「ちょっと、走って来い。役に入りながら考えろ！」

かず「は、はい」（もたもたする）

ゆき「いけ！」

かず「・・・はい」

かず、ぼさーっと掃ける。

タイガー「始まったな」

ゆき「初めての役作りか。いいなあ、演劇」

ロブ「ゆきさん。稽古つけてください。」

ゆき「手加減しないぞ」

ロブ「はい」

ゆき「まずはロブからだ。桃太郎先輩が戻るまでに再調整するぞ」

ロブ「はぁい」（ちょっとだけ役入ってる）

みよ「ちょっと萌えた」

タイガー「あ、そういえばみよは台詞大丈夫か？」

みよ「みよは歌詞も振り付けもライブ当日に覚える優秀な子ですよ」

タイガー「覚えたのか？」

みよ「やれば大丈夫。みよはヒロインですから！」（何か必殺技）

タイガー「意味がわからん」

ロブ「本番に強いタイプか。そりゃ訓練嫌いだわな」

ゆき「ロブちょっと待ってて。私みよちゃんとちょっと合わせるわ」

ロブ「お待ちしてマース」

ゆき「ポイントは選ばれし暗殺者の風格なんだよね」（掃けながら）

みよ「鋭さを垣間見せるか、実際鋭いオーラを出すか」

ゆき「眼だな。眼からビームしかないな」

みよ「あ、出ますよ。ビーム」

ゆき、みよを伴って掃けていく。

遠くでゆきの怒声とみよの平謝り。

ロブ「さあて、これをどうするかだな」

タイガー「なんだそのライト」

ロブ「ビーム」

タイガー「どう見ても普通のライトだろ」

ロブ「いい玩具もらっちゃった。タイガーの出番これ使ってみない？」

タイガー「え？」

ロブ「いいこと思いついちゃった」

タイガー「照明やりながら出演するだけでも器用なのになんだんだ」

ロブ「ひらめきは試したくなるタイプでね」

タイガー「俺のどのシーン」（掃け始める）

ロブ「タイガーが動いているところに合わせるよ。あっちで試そう」

タイガーとロブ掃ける。

かずが走ってくる。（走っている体裁）

かず「きたぞー。きたぞ？ きたぞ、きたぞ。んー。」

かず、気づき始める。

かず「強くなったんだよ。・・・そうだ！ 強くなったんだよ！」

立ち止まって、ふぅふぅしてる。

かず「センターに立てる気がする・・・強くなったんだよ」

みよが現れる。

みよ「私はいつだって真ん中にいるよ！」

ロブ「ぴこちゃーん」

みよ「今日の私はぴこじゃない。ましてやみよでもない！ 私がヒロインだ！」

ロブ「ひろいーん」

みよ「そこの主人公風の少年！」

かず「・・・俺？」

みよ「勝負よ！」

かず「なにが？」

みよ「勝った方が告白してもらうっていうのはどう？」

かず「なにが？」

みよ「私とあなたが勝負をして、負けた方が」

かず「なにが？」

みよ「だーかーらー」

ロブ「ひゅーひゅー」

かず「おいおいおいラブストーリー入れる余地ないよ」

みよ「あこがれのかわいい子になるのが私の宿命なの」

ロブ「たぐい稀なる妹性だ」

みよ「もー、うといんだから」

かず「うとくねえよ。集中してんだよ」

みよ「私の負け。かず君のことが好き」

ロブ「ひゅーぅ」

かず「ちょ、ば」

タイガー「アウトー」

みよ「いかがですか。私のビームは」

ゆき「このばかー！ コロスってのはそういう意味じゃなーい！」

みよ「だってー。」

ゆき「だってじゃない！ かずもひっかかんな」

かず「なんなんだよ」（※本気ギレで）

タイガー「あ、やばい」

タイガー、ゆきを連れて避難。

かず「なんなんだっつってんだよ！ 集中してんだよこっちは！」

暴れようとするが、顔に光が当たる。

ロブ、光を当てつつ、避難。

かず「人がせっかく役にのったところにより！ ってまぶしい！ まぶしい！」

みよが飛びつく

かず「やめろよ」

みよ「ごめんなさい」

かず「なんだよ」

みよ「調子に乗りました」

かず「なんなんだよ結局」

みよ「学園祭、楽しもう」

かず「もう時間ないな」

みよ「人前は初めて？」

かず「こういう形では・・・」

みよ「みんなそう。いっこいっこ初めての舞台」

かず「だな」

みよ「目の前の役に一生懸命なあなたが好き」

かず「センターに立つ、意味が分かった」

みよ「センター？」

かず「もらった役は脇役じゃない。いろんな面を持った主人公だ」

みよ「かず君かっこいい」

桃がいる

桃太郎「恥を知れ。ぷふぅ」

かず「あ！　うわ！」

桃太郎「そろそろ通すぞ」

かず「は、はい」

かず「俺達はいっぱい通して、寝て起きて、リハーサルを５回やって本番を迎えた！」

11

本番。

タイガー「本日は小劇場研究会フィート桃太郎先輩による公演「赤頭巾さん」にご来場頂きまことにありがとうございます。公演に先立ちまして、ご注意がございます。本公演はアコースティック楽器連盟様のご厚意によって、バンドと同様の枠で行っておりますので、大変に短い公演となっております。設備等も演劇用にはなっていませんので、ご了承くださいませ。ではまもなく開演いたします」

ここに劇中劇を入れる

タイガー「本日はご来場、まことにありがとうございました！」

拍手！（奥でバンドの始まる雰囲気）

ゆき「えらい！ みんな、よく頑張ったね！」

かず「立てた。立てたぞ！」

タイガー「ありがとう！ ありがとうみんな！」

ロブ「青春しちゃったー」

桃太郎「良い公演であった。ゆき、タイガー」

二人「はい」（ゆきとタイガー）

桃太郎「よいリーダーになったな」

二人「ありがとうございます。桃太郎先輩」

桃太郎「ロブ」

ロブ「はい」

桃太郎「いい男になったな」

ロブ「先輩がいい女ですから」

桃太郎「・・・ぴこ」

みよ「はい」

桃太郎「見違えたぞヒロイン。役者は面白いだろう」

みよ「はい。桃太郎先輩」

桃太郎「少年」

かず「俺？ すか」

桃太郎「今後はぴこのいい練習相手になってやってくれ」

かず「は、はい。」

桃太郎「さ、そろそろ次にいかねばな」

全員「先輩！」

桃太郎「そうだ。これをやろう」（配る）

ロブ「また告知ですか・・・あれ？」

桃太郎「明日、展示の横で、同じように十分で出し物をやるやつらがいる」

かず「狭っ」

桃太郎「役者が何人か足りないそうだ」

ゆき「先輩出るんですか？」

桃太郎「脚本も決まったばかりだ。助けてやらんとな。」

かず「邪魔しに行っていいですか」

桃太郎「丁度いい。動ける奴が欲しかったんだ。みんなは？」

ロブ「お邪魔じゃないんですか？」

かず「手伝いにいって、仲間になれば遠慮はいらないよ」

みよ「かず君が行くなら行く」

かず「その流れは出来てないって言ってるだろう！」

タイガー「行こう！ 魂を燃やせ！」

ロブ「役を掴め！」

みよ「お客さんに飛ばせ！」

ゆき「そして会話をしろ！」

かず「センターに立て！」

桃太郎「付いてくるがよい！ 小劇場研究会のセンターボーイズ！」

幕

設定

キャスト表　告知用

センター・ボーイズ弱小演劇サークルが部室で大活躍

総合大学の地方キャンパス。そこはなんと演劇系サークル連合が三つも元気に活動している。そこでひっそりと活動している小劇場研究会。

あまりに人数も少なく、学園祭のネタも展示にしようか相談中。第一、研究会なので本番を打ったことがない。

学園祭で予定していた会場が有名教授に横取りされ、大所帯であるミュージカル連合は半年準備した本番が打てない事態が発生！ 同じく他の演劇系サークル連合も本番が打てない見込みに。

ミュージカル連合でヒロインを演じるはずだったゆきに用意できた会場は食堂脇の喫茶コーナー。準備が間に合うのは小劇場研究会のみ。

「助けて！ あなたたちしか頼る人がいないの」

「断る！」

狭く！ ひたすら狭く！ 熱く吼えろ！ そして演劇が好きになる！

■キャスト

かず 初心者。元スポーツマン。

タイガー 前サークル長。スポ魂タイプ。

ロブ 手先器用ななんでも屋。スタッフ件役者。

みよ 幽霊部員。。実はメイドル。

ゆきミュージカル連合の有望女優。事情があって助けを求める。

桃太郎先輩学内の全てのサークルを掛け持ちしていると言う噂。在学生なのか卒業生なのかも謎の女性

学内の概況

とある大学、芸術学部を擁する上、関連学部も多い。キャンパスが全国に多くあり、また、学生が学内中心に活動する傾向にあり、とにかくサークルが多い。大きく分けて、文化系、体育会系、舞台系である。

舞台系には大きく三つの連合があり、その特色も異なる。

■劇連

劇団を名乗るサークルが集うことにより始まった 劇団共同体連盟（通称・劇連）は、演劇サークルのみならずスタッフ系専門のサークルや同好会が横断することで有名。新劇系、小劇場系、現代劇系など完全に混ざっており、各劇団ともやり甲斐充分。大きい会場を連合で貸切り、演劇祭のようなこともできる。学園祭の日にキャンパス外で公演を打とうとしているなど、結構柔軟。

連合長は巻舌龍之介（演劇集団☆星の忍者 座長）

■ミュージカル連合

劇連に対抗するかのように幅を利かせているのが ミュージカル連合である。そもそもはジャズダンス系サークルとコラボした劇連系演劇サークルが、味をしめて肥大したものである。各個でも舞台を行うが、大掛かりなものを大所帯で行うことに特に秀でている。体育会系の色彩が強く、練習方法や業務などが統一されるなどしており、人材の層が厚い上、統制がとれている。「小劇場研究会」のような零細サークルもあれば、「アニミュ。」など、新手のイケイケサークルも出現している。

連合長は乾ゆうと（劇団プラチナウィング 代表）

■舞台芸術連合

役者中心の演劇からの脱却を目指したところから始まったとされるのが舞台芸術連合である。学部は美術なのに演劇をやっているなどのタイプが多く、とにかく発想が豊か。ヲタが多く、新しい装置を他の連合にも提供している。今年の出し物は役者の声をサンプリングしたボーカロイドでオペラをやろうとしていた。

連合長は冬月勝（ロボカンパニー主宰）

■連合会議

これをまとめているのが連合会議と呼ばれ、会場の折衝や褒章などしている。

褒章の主なものは月影賞、姫川賞、北島賞である。

議長は桃太郎先輩（全サークル所属）

かず

本名・藤沢和馬
やぎ座 O 型 1 年生
家族構成・父・母・姉・自分

元スポーツマンで、体育会系文化サークルを目指し入部。とにかく質問が多いが、その着眼点は見事に演劇の基礎を探り当てている。

■役づくりのヒント

できるできないじゃないやるんだと言っていた人ができないと言っている→パニックで殴ってダッシュ→遠くに行くわけでもなく部室の様子を伺う→タイガーの「本が先」の

重みを知りほだされる→ロブが急に心を開いていて仲間意識アップ→つい自分の話→共感してくれるゆきさんに信頼を置く→ついていきます→みよも帰ってきて押せ押せムードに→突如現れた桃先輩に主人公意識の低さを指摘される→走って悩んで飲み込んでいく→みよの役作りに巻き込まれる→爆発しそうになるが、案外みよの癒し力が高い→恥ずかしさをバネにもっと練習

「舞台に立ちたい」という最も原点となる思いが出れば、かずは OK である。それゆえに中堅どころにはかえって難しい。新人の初陣というのは普遍の要素だと思うので、上演のたびに解釈が異なったり、役者によって随分違ってても良いといえる。

タイガー

本名・橘 虎徹
いて座 A 型 3 年生

サークル内で最も信頼されているお兄さん。演劇少年だったのだが、大学では本番に出ていない様子。ミュ連の朝練には出ているようで、他のサークルからも一目置かれている。

元サークル長にして小劇場研究会創始者。かつて劇連の脚本部が使っていたといわれる出自の書庫をサークル室にして、ミュージカル連合加盟のサークルとして登録した。

■役づくりのヒント

夢よりもゆきをとったため喧嘩を売られる→巻き込まれたかずが爆発→３年分の思いを振り返る→ロブの心を開く→かずを受け入れる→熱い稽古場を決意→先輩登場→役者が欲しいと懇願→手応えに成長

特に重要とされるのが「熱い稽古場を決意」である。

ロブ

本名・桐生蘭
いて座 AB 型 2 年生
実家暮らし（マンション）父母自

天性の解説君。とても高い確率で部室にいる。器用で、役者と照明を兼ねるということにあまり苦を感じない。とても万能だが、言いだしっぺにはならない。

■役作りのヒント

全部の予想が巻きになり、自分がなぜ一緒に舞台に立とうと思ったのか確認したくなる→とりあえず本に興味あるという話をする→ゆきŒタイガーの熱論とかずのダッシュにというひどい状況を目の当たりにし、理屈で片付かない→タイガーの真摯な説明に胸打たれる→出ればわかるという話、そして触れられたことのない「何者？」の疑問に心を開く→何でも説明できるロブが、嘘もつかず隠すわけでもなく、たったひとこと「休んでるんだ」という言葉にまとまる（普段すぐ言葉にしてしまいフラットなところ、ここは思い切り感情を出す）→自分の中で「部室の人」という定義ができる→強い仲間意識が芽生える→いつものあの人が大先輩だと知る

説明台詞がとにかく多いので、滑舌のよい人を選ぶといい。全体が熱い中、クールそうにしている感じがだせると正解。「大学で休んでいる」のニュアンスは裏設定等を無視してもよいが、そこに物語の広がりを感じてもらえると一時間作品の枠を超越できる。

■浅い裏設定

つくばの方の理系大学に行くはずが受験の合格発表頃に震災があり、安全上の理由から両親の反対されてしまい行けなくなってしまった。

無目的に文系の大学に入った。国公立を目指していたので、教科の偏りもなく、受験そのものでは苦労していない。

→あんまり震災をネタにしたくないので、この設定を隠しきれない程度のニュアンスに含むのがまあ、普通の演劇としてはありではないかと。大人が見ていたら、今二年てことは、あれか、とすぐに気づくと思う。

部室にいると、桃太郎先輩が本を借りに来る。

恋なのかなんなのか、この特殊人物との交流を楽しんでいるようだ。

ゆき

本名・高城有貴（たかしろゆき）
B 型 大学 3 回生

才色兼備の元気な女優。小劇場研究会のサークル長であるが、ミュージカル連合の総合基礎トレ隊長として有名。姫川賞を何度か受賞しており、ミュ連が誇る学内ヒロインの一人と言われている。

役作りのヒント

女優力全開の学園祭準備で過労になるまで頑張っていたのに、本番がなくなった→なんとかしてお芝居がしたい→助けを求め部室へ→緊急公演で全部背負う→タイガーに出てほしくて脚本変更できない→泣き言→タイガーの足りなくても頑張ろうに安心→色々話してから動機を聞くはずが唐突にみんなに聞く→タイガーの言っていることが急に理解

できなくなり荒れる→かずの暴走でもっとよく分からなくなる→かずを追うと結局部室に→タイガーの話が聞けて愛が深まる→ロブにも親近感が増す→かずの話に感動→超やる気→まとめる→みよが帰ってくる→超嬉しいがツンデレ→超大物ゲット→オラオラ状態

鉄板ともいえる「仕切りたがりヒロイン」である。女優を体育会系的に挑んでいる面と、実際の恋愛における若干の未熟な面が同居していることが要点。「この日に舞台に立つと決めていた」という半年ないし一年間を感じさせることができれば大成功である。

みよ

本名・冬月美夜
乙女座 B 型 2 年生
父母兄自
ライブアイドルの自由が丘ぴこ

短期決戦に強い。瞬発力最大。状況に合わせて生きているので、キャラの幅がある。兄とは同じ学校に行かないと言いながら、結局同じ大学にいるという天性の妹キャラ。

色んなことに多感。アイドル的活動も向いていて、地道に楽しんでいる。桃太郎と面識がある。
大学では本名で生活しており、目立つ活動のない小劇場研究会に所属。本人はうまく潜んでいるつもりだが、裏ブログも筒抜けで、ツィッター上でも動きが全部把握されている。これはお兄ちゃん達の配慮である。

ファンとあまりにもリアクションが違うかずに強い興味がある。かずをどうしたら取り込めるかに熱心。両思いになることに自信があるようで、好きという態度を隠さない。

■役作りのヒント
急に現れたゆきに「一緒に大学を救おう」みたいなことを言われ、面白そうなので合流→同じことの繰り返しが苦手→本番当日まで身を隠そうと、執事喫茶に逃げこむも、長きにわたる桃太郎の罠で、確保される→乾グループにはお姫様扱いされご機嫌なうちに運ばれる。勝には直に捕まりゴネ倒そうとしたが、珍しく強引な兄に運ばれる。→脱走計画は負けた。生きて帰ってきた恥を知り、叱っていただきたい気持ちになる→ゆきさんの愛がいっぱい→ヒロインの使命に覚醒→今ならかずに勝てる気がするの→キレられる→天災を鎮める村娘のような気持ちでかずに近付く→好感触→次から次へといい台詞が出てしまう→本番でヒロインの使命を果たす→すでに押し掛け彼女

ロブに「類稀な妹性」と言われているように、この子のアイドルとしての資質は「妹性」に尽きる。特に末っ子としての妹としての半生であるため、いじられることもかわいがられることの一つとして受け止められる。まだ苦労を楽しめないため、浅はかな脱走などを試みる。魂の叫びが「みんなに寄生して生きていきたい」であることは感慨深い。その望みどおり「出番少なめでおいしい」ので、芸能志望の子がやるのに丁度いいはずだ。

桃太郎

総長・ももこ
(本名・佐伯桃)
1989 年 5 月 29 日 23 才
双子座 B 型 大学 5 年生 (留年中)
趣味、桜前線を追い掛ける。ドラマ鑑賞
特技、茶道
性格、面倒見がいい。
家族構成、母と弟と三人暮らし

父は離婚して仙台。
出身、仙台。

バイトし過ぎで月収 25 万。
生活を支えている。

学内のサークル離れが激しい時期に入学し、全てのサークルを救うことを決意した伝説の人物。己の活動を基点として「インパクトのある出しもの」で共感できる仲間を募るため、演劇部にまず力を入れる。その甲斐あって春には巻舌、乾、冬月という有望な後輩を手に入れる。大学側にサークルというものの重要性を知らしめる願いを懸けて、禁断の脚本「雷釈童」を上演。田中英津子役を全うする。
この公演の成功をきっかけにサークル設立の決裁権が学生の自治に委ねられる。設立が容易になるよう、いかなるサークルでも桃太郎の名前が申請用名簿に必ず書いてあり、記入例ではなく実際にメンバーになるという異例の存在になる。
演劇系サークルが無数に復活し、また新設サークルも激増。連合がいくつもできてからは、サークルひとつひとつに手を貸している。
予算が回りにくいサークルもあり、桃太郎が払う場面も多い。そのためバイトも多いせいか結局留年した模様。しばらく本人も留年に気付かず社会人していた。
不在に乗じて教授陣の力が強まっており、学園祭が荒れるのを防ぎたくて復活。

性格・行動ともに自由人。一種の天才で学生がサークル活動する環境づくりに熱心である。脚本の内容は覚えるがタイトルはうろ覚え、凄く尊敬されているが威厳があるわけでもないなど、アンバランスさも売りである。

役作りのヒント

学園祭直前にパトロール→いろんなサークルを手助け→後輩の気配を感じて部室に来る→赤頭巾を練習していたので混ざる→出演を要請される→快諾→よそのサークルも助けつつ稽古に参加→こまごまとアドバイス→本番→次のサークルへ。

タネ明かしは後述するが、いかなる華の在り方でも光るようにできている。明らかに厳しい稽古があるはずなのに「その遊びなら知っているから混ぜて」みたいな気軽さに、皆が心を許すのである。

ロブの裏設定から読む CENTERBOYS

他の作品を引き合いに出しているので、CENTER BOYS のみだと理解できないはずで、知らなければ知らないで、青春モノ作品。知ればファンタジー作品になるという裏設定。

■ロブ裏設定

時空難民。本名：堀蘭太郎（通称リラ）

2000 年夏、相模大野にてメルヘンファンデーション事件に遭遇。

メルヘンファンデーション試作 4 号機を持ち出したのが事件のきっかけであるので、主犯格である可能性もある。当時は高校 3 年生で、美女養成講座講師をしながら、大学生の彼女を連れてサトシの部屋を訪れていた。（VeNus 参照）

結局人類全体がサトシの心の中と混ざってしまい、恋愛至上主義国家になったため、サトシの全人類に聞こえてしまう告白以降、世界がストップしてしまう。うまいこと、脱出したが行き場がなく、2011 年春に震災やらなんやらのどさくさで、ようやくこちらの世界にもぐり込んだ。

自分がいた世界の復旧を真に望んでいるため、人が変わったように万般の学問を学んでいる。またメルヘンファンデーションについては特に研究を怠らない。

演劇とりわけ盛留作品に満ちたCENTERBOYSの世界に疑問を抱いており、案の定、赤頭巾さんを読む。雷釈童はファンタスティックパウダーに恵まれ過ぎた人物であり、その制御のため、人でありながらメルヘンファンデーション試作１号機と認定されている。彼の疑問とは、この学校にもファンタスティックパウダーが展開しているのではないかということである。

ファンタスティックパウダーは実はさほど特殊な力ではなく、創意によって成り立つため、高度に組み合わせると創造がとにかく早い。コツを掴めば、落書きを立体造形にすることもできる。

この体現者が桃太郎先輩である。

VeNusを演じても雷釈童を演じてもファンタスティックパウダーは展開する。この学内で雷釈童上演をしてしまったのは桃太郎と愉快な仲間達である。

田中英津子役：桃雷釈童役：いぬい

１４役：まさる 他全部：まきじた

おそらく、この学校ではこの上演がきっかけで、演劇人口並びにファンタスティックパウダーが増加したものと思われる。

■広義のファンタスティックパウダーにまつわるサーガ

白：雷釈童の特性 真空モテモテ波

ピンク：メルヘンファンデーション 幻想粉など白より少し柔らかい

以下の三つはバランスを取り合っている

青：特定の人物の個性が全体に反映する力ブルーファンタスティックパウダー

緑：願いを叶えあうために、人が集まる力 電波塔物語の電波

赤：特殊な能力を拘束する力 紅い宝石など

全ての盛留作品の原案者である娯誠粒真一は青のファンタスティックパウダーに侵されている。彼の見守る世界のうち、彼の影響を受けないようバランスをとっているのが電波塔の影響する世界である。世界を見守っているせいか、テロ被害は雷釈童よりも深刻で、真一を狙った宝石戦争と呼ばれる事件に風間唯人までも巻き込まれている。

リラはどういう経緯か中学の頃から真一の弟子を名乗り、何も教えてもらえないので、雷音寺から美女養成講座講師の資格を与えられたりしている。

紅い宝石は風間唯人と御堂茜という、風間響の子供たちが持っている。緑と青のどちらも抑えられるらしい。

SAYURI が試作してしまった簡易メルヘンファンデーションが紛失した際、普通の少女が魔法ステッキとして使用してしまい、世界が一つ魔法少女に乗っ取られた事件があり、この解決の際も風間唯人が駆り出されている。

■ロブの立ち位置

以上から、時空難民と考えられる。

彼の本来の姿は堀蘭太郎であり、おしゃべりなおしゃれさんである。

追加素材

劇中劇「赤頭巾さん」

■劇中劇「赤頭巾さん」

姐さんと赤頭巾は同じ人がやってよい

姐さん「あんたの親分は誰だい？」

赤頭巾「親父と姐さんです」

姐さん「そうだね。あたいにも親ってやつがいてね。」

赤頭巾「姐さんより偉い人がいるんですかい？」

姐さん「上には上がいるもんさ」

赤頭巾「へい」

姐さん「いわゆる本家の総長さんさ」

赤頭巾「恐ろしいですな」

姐さん「お前を信用して、届け物があるんだよ。行ってくれるかい」

赤頭巾「本家に・・・ですか？」

荷物を渡す。

姐さん「それと、もしもの時によく覚えておくんだ。」

赤頭巾「はい」

姐さん「雑魚はなるべく交わしな。どうしてもって奴だけやっていい」

赤頭巾「それは・・・姐さんとの約束で」

姐さん「いいんだ。大事なお遣いだ。」

赤頭巾「大事な、お遣いなんですね」

姐さん「いいかい。赤頭巾ちゃん。しくじるんじゃないよ。」赤頭巾「分かりました、姐さん。必ず総長に届けます」

姐さん「ちなみに総長はあたいの姐さんだ」

赤頭巾「え？」

姐さん「部屋に入るときの合言葉は『お婆さん』

赤頭巾「はい」

姐さん「かわいがってもらうんだよ・・・お行き」

場面変わって総長の部屋

ホストのリョウジといちゃついている

リョウジ「ももこさん。」

総長「はい。リョウジさん」

リョウジ「僕は必ずあなたを護ります」

総長「私、ここらじゃ一番強いんだよ」

リョウジ「何言ってるんですか。お姫様は護られていてください」

総長「リョウジ、かっこいい！」

リョウジ「ずっと一緒にいたいのですが、出勤の時間です」

総長「私が絶対ナンバーワンにするからね」

リョウジ「では、お店でも待ってます」

二人「愛してる」

リョウジ、去る

総長「もう夕方。私の血がたぎる前に、荷物は届くのかしら」

大神一郎「ようババァ！」

総長「ここをどこだと思ってんだい？ 大神一郎」

大神一郎「ババァんちだろ？ 来てやったぜ」

総長「悪いけど、あんたじゃ相手にならないわ」

大神一郎「これならどうだ」

空を斬るパンチ

総長「当たらないよ」

大神一郎「どうかな」

総長「うぐっ・・・なんだこれは」

大神一郎「強くなっただろう？ あんたに勝ちたくて鍛えたんだよ」

総長「お前はミスを二つ犯した」

大神一郎「あん？」

総長「一つは時間帯が悪い」

大神一郎「あん？」

総長「もう一つは私をやる気にさせたこと」

大神一郎「話が早いな」

総長「ふんっ」

適当に暴れる。

大神一郎「いい勝負になってきたじゃねえか」

総長「そうかな」

大神一郎「ぐふ」

総長「経験の差ってやつだよ。ハハハハハハ」

大神一郎「てめえ、普通の人間じゃねえな」

総長「ちょっと血の気の多い、」

赤頭巾「おばーさーん」

総長「あんたは？　・・・ぐほっ」

大神一郎「余所見してんじゃねえよ」

赤頭巾「総長！！！」

大神一郎「残念！　俺の勝ちだ！　このババァは俺のもんだ」

総長「荷物は・・・持って来たかい」

赤頭巾「はい」

大神一郎「おい、その女は誰なんだよ」

総長「少しお黙り」

大神一郎「・・・（口が開かない）」

総長「あの子はあなたを選んだのね」

赤頭巾「え？」

総長「私は普通の女の子に戻る」

赤頭巾「普通の女の子？」

総長「私は恋をした。だから、私の力は貴女が継いで」

荷物を空ける。謎の光。

赤頭巾「力が・・・」

総長「あとは感覚でわかる」

光終了

大神一郎「しゃべれた！　ふざけやがって！」

リョウジ「待て！」

大神一郎「あん？」

リョウジ「ぐは！」

総長「リョウジ！　逃げて！」

リョウジ「ももこさん！　迎えに来ました！」

大神一郎「このババァは俺のもんだ！」

赤頭巾「どら！」（腕を掴む）

大神一郎「ぶほ」（連れていかれる）

総長「ついていきますリョウジさん！」

リョウジ「行こうハニー！」

二人の世界。

リョウジ「あれ？　あれ？」

去った方向から、大きな赤頭巾が来る

赤頭巾さん「これが・・・総長の力？」

リョウジ「まさか大神のやつ！」

総長「いいえ。赤頭巾。貴女ね」

赤頭巾さん「赤頭巾・・・そうか、私は赤頭巾」

リョウジ「赤頭巾・・・さん？」

総長「敵を吸収して強くなる。それが私の力だった」

リョウジ「だった？」

総長「普通の女の子になったの」

リョウジ「ハニー」

総長「リョウジさん。」

赤頭巾さん「そうか。私は強くなったのか」

総長「赤頭巾さん。貴女がいれば天下統一も夢じゃない」

赤頭巾さん「できる・・・できる気がする」

大神三郎「よう」

リョウジ「あれ？」

大神三郎「犬も連れてってくれよ」

リョウジ「あん？」

赤頭巾さん「別人です。匂いで分かります。」

大神三郎「おひけえなすって。おいらは大神三郎と申します。兄の一郎はじめ札付きの一家出身ですが、ちいとは役に立つ犬で御座います。ただならぬ気配に、馳せ参じました。兄貴・・・いや兄貴を吸収した赤頭巾さん。ご一緒しますぜ」

総長「普通の女の子になったのに、結局家族が増えたね。」

赤頭巾さん「総長！」

総長「全員面倒みてやるよ。人遣いは荒いから覚悟しな」

３人「へい！」

かっこいい曲で終わっていく。（オチはなんでもいい）

※出展「小劇場公演のための戯曲『ワインレッド』第二番 雷釈童」内に登場する

劇団ミッドスカイ公演「赤頭巾さん」より

奥付

あとがき「理想の先輩」

執筆の経緯

この作品は Pinkerbell と TEAM145 が合同主催公演を再度行うにあたり、日程やある程度キャストが決まってから急遽書き下ろされました。本当に時間がなく、パクリ感のない作家性が売りだったにも関わらず、時間がない分は断固パクる！ という気概で執筆した作品です。映画「フレフレ少女」「スウィングガールズ」「ウォーターボーイズ」といった青春モノが土台になっています。大きく違う点は「カフェ公演」というマイナー演劇を扱っていることです。

理想の先輩

片や Pinkerbell では座付き脚本家、片や TEAM145 では（谷頭が顧問であるため）後方支援と、縁が深いわりに合同主催公演には反対の立場であったために、当初不参加でした。それは私が社会人であると同時に、彼らほど若いわけではなく、ひっきりなしに舞台舞台というわけにはいかなくなっているという背景があります。

私は散々ごねた挙句、きつく叱りながら執筆をし、またお抱えの役者である雷音寺や谷頭を投入することを条件に参加しました。桃太郎はというと、ぷらっと表れ、「よかろう」と簡単に参加を決め、しっかり楽しんで本番を成功させました。

脚本の内容も演劇に取り組むことの厳しさばかりが強調されていますが、桃太郎は遊びのように稽古と戯れ後輩育成の手段にしています。

そこへいくと、桃太郎というのはなんと理想的な先輩なんでしょう。実際のところ桃太郎ほどの年の頃は就職活動あるいは社会人の最初の方である可能性が高く、自分のことで手一杯であるはずです。ファンタジー作家がスポ根を描く上でついた一番の虚構は、「理想的な先輩」というファンタジーなのです。

二段階の持ち上げ

公演を成立させる上で、ゴリ押しした二人の役者投入が必須でした。それは桃太郎の存在を着地させることがカラクリの全てです。自由人をどう尊敬させるかは大きな課題です。そのため、桃太郎先輩の直近の後輩が必要でした。タイガーとゆっきーがびびるほどの存在として「いかにも先輩」を登場させ、彼らに大物として紹介させることにしました。用意できる中で一番役者っぽい人がわざわざ演劇できるぜ風に登場し、「もっと凄い人」として桃太郎を持ち上げておく。そうすると裏の努力についての説明を省けます。

ダブルキャストのどちらの桃太郎役も謎のエネルギーで動いているままの役者さんが、結果として余計な説明なしに暴れられるのです。

便利な脚本

世の中にはヲタ性のあるものは一切受け付けない層と、ヲタ性なしにはなにも楽しめない層とがあり、この公演での客層はまさに混在することがわかっていました。そこで、公演だけ見るとファンタジーっ気はないのに、調べると実はファンタジーだという脚本づくりになりました。これはファンタジーに支えられた、スポ根作品です。

また、全く演技指導者がいない中で演劇を始めるためのヒントもたくさん入れてあります。根性論という側面と、稽古論という側面。義務教育に演劇という科目や教科書がない中、共有できそうな基礎技術に少し触れています。

追加シーン

先行して上演版を発表しましたが、近々追加シーンを入れます。すでにお買い上げになっていれば、再度パブーで読み返していただければ読めるようになっているはずです。

2012 年 11 月 神奈川にて

盛留真悟

奥付

カフェ公演のための戯曲「センターボーイズ -CENTER BOYS-」

２０１２年盛留真悟作品

“CENTER BOYS” (C)MoridomeShingo2012，ALGI Products2012

■この物語はフィクションです。実在の人物・団体等とは関係ありません。

二〇一二年盛留真悟作品

著作権管理 アルジプロダクツ

※劇中や設定に登場する「雷釈童」「VeNus」は盛留真悟の著作であり、著作権を管理するアルジプロダクツは盛留真悟の個人事業である。したがって、この作品における全ての権利は盛留真悟が有する。

※この作品は 2012 年の Pinkerbell & TEAM145 合同主催公演用脚本を再編集し、改行等の修正を加えたものである。編集に当たり解説や加筆をした。予告なく訂正や加筆を行うことがあるが、バージョンは奥付等に記録される。

転載などに関するガイドライン

※営利の目的ではない教材等への引用は自動的に許可される。その場合、著作人格権の主張に伴い、RaiiShadow（http://plaza.rakuten.co.jp/）もしくは盛留真悟（http://moridome.com/）の表記を義務付けるものとする。

※ 上演許可等について。

・本作品の使用 (＼ *1)* は営利目的でない限り無料です。（上演許可料無料）

・本作品の使用 (＼ 1) にあたり課金する場合は上演料・販売価格などの 5〜10 %にご利用人数 (＼ *2)* を乗じた料金を請求いたします。ご使用 (＼ 1) の際には著作権管理者盛留真悟までご連絡ください

(＼ *1)* 使用とは

演劇としての上演の他、映像化やコミック化、ノベライズ、*N* 次創作を含む諸々の作品化です。

(＼ 1) 利用人数とは

お客様と製作者を合計したものです。

アルジプロダクツ 盛留真悟（２０１２年９月２５日）

CENTER BOYS https://puboo.jp/book/57044

著者：盛留真悟_ALGI Products

著者プロフィール：https://puboo.jp/users/algiproducts/profile

感想はこちらのコメントへ https://puboo.jp/book/57044

ブクログ本棚へ入れる http://booklog.jp/item/3/57044

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（https://puboo.jp/）運営会社：株式会社ブクログ

CENTER BOYS

著　　盛留真悟
編　集　ALGI products

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社